

幼児の心情理解に及ぼす絵本の読み聞かせの効果

今井靖親・坊井純子*

(奈良教育大学心理学教室)

(平成6年4月28日受理)

子どもたちは物語を通して、自分の身に実際に起こったことでなくとも、あたかも自分自身の経験であるかのように、想像的にそれを受け入れることができる。また登場人物との同一視によって、感動や知的興奮などのさまざまな情緒的体験をすることができる。このような幼少期の物語との触れ合いが、のちに子どもの言語能力や情緒的発達に深く関係するという事実については、既にいろいろな報告がなされている。

例えば、市川(1982)は小学校3年生には思いやりを、4年生には自律心をテーマとする本を課題図書として、月1冊のペースで2年間与えることで、読書指導の効果をみている。その結果、YG性格検査の項目で劣等感の減少・協調性の増加・社会的外向傾向の増加が認められ、他の質問紙による行動評定でも、自律心にかかわる意識が育ってきていることが見いだされている。

しかし、幼い子どもにとって自分一人の読みだけでは、物語を深く味わい、想像し、その世界に十分にとけ込むことはできない。そこで、大人による「読み聞かせ」という方法をとおして、物語と触れ合う機会をもつことになる。

絵本の「読み聞かせ」は、大人と子どもの親密な人間関係を基盤として、文字で書かれた文章を大人が朗読し、子どもは本に描かれた絵を見ながら、耳で大人の音読を聞く、という独特のコミュニケーションスタイルを備えている。

では、絵本などの読み聞かせは、幼児にとって、どのような教育的意義があると考えられているのであろうか。今井・廖・中村(1993)は日本における従来の絵本に関する心理学的研究を調べ、以下の3点にまとめた。

- (1) 想像力を育む 佐々木(1975)は、絵本から得るものとして、創造的想像力、美しいものを発見する感動、空想の世界に遊ぶことの楽しさ、さまざまな人間的感情の広がりや深さの経験をあげている。本田(1980)は、幼児は絵とことばによって表現された世界に出会うことで、実在を越えたイメージの世界を楽しめるようになる、と考えている。そして、優れた絵本は、知識を「既製のまま」に注入するのではなく、そのプロセスである「想像すること、考えること」の力を養っていくものであることを強調している。
- (2) 言語能力を高める 阪本(1974)は絵本を読書への入門として重要視し、就学前より小学校低学年までの児童に対する読書指導を絵本を中心として行うことを提唱している。漢那(1979)は、10か月間、小学校1年生に、毎週1回絵本の読み聞かせを行い、読み聞かせ群が非読み聞かせ群よりも、読書力が有意に伸びたことを報告している。山本(1990)は、幼稚園年長児に、1年間、特に計画的に読み聞かせを行った結果、読み聞かせを普通に行った子どもたちと比較して、

* 現在は橿原市立耳成幼稚園

「作話テスト」において、優れた成績が得られたことを見出している。

(3) 人間関係を豊かにする 絵本の製作者である松居 (1973) は、自分が母親から本を読み聞かせてもらった経験、我が子に読み聞かせを行った経験から、親と子が一つの物語世界を共有する経験を重視している。また、絵本作家の赤羽 (1986) は、母の読み聞かせは、子守歌に代わるものであり、母と共にいる安心感と心地よい響きが、子どもと母親を密接に結びつける重要な要素であることを指摘している。

このように、絵本などの読み聞かせの意義について、従来の研究を展望してみたところ、意外なことに、絵本などの物語の読み聞かせをとおして人間の生き方や人と人とのかかわりについての理解を深める、というような意義については、ほとんどとりあげられていないことが明らかになった。

一般に、物語は開始部・展開部・結末部という構造をもち、その中で主人公を中心とした登場人物の行動と、その経過や結果が記述されている。従って、物語の読み聞かせをとおして、子どもは登場人物の行動や心情をあたかも自分がその人物と同一であるかのように体験する。このような経験は、単に子どもの言語能力を促進するとか、想像力を豊かにするなどの効果にとどまらず、子どもがさまざまな人間の生き方に触れ、人間の姿、人生というものへの理解を深めることに大いに役立っていると思われる。この視点に立って絵本などの読み聞かせの効果を検討し、客観的なデータを提供することが望まれるのである。

ところで、幼児の心情理解に関する研究は、従来は共感性の領域で検討されてきた。例えば、岩田・山口 (1987) は絵本の理解に及ぼす共感性の役割について研究し、その結果、共感性の高い子どもは、低い子どもよりも物語内容を多く再生することができた。また、物語のなかでの登場人物の情動的喚起が著しい場面や感動詞・心情語の再生成績が低共感性群よりも有意に優れていた。また、久保・無藤 (1984) は、小学校3年生を対象に、類似経験の想起が他者の気持ちの理解に及ぼす効果について検討した。その結果、類似のエピソードを想起させることにより、他者の気持ちの理解が促進されること、他者と快・不快に関して、同一の情動を喚起させることによっても、気持ちの理解が促進される可能性のあることが示唆された。また、他者の気持ちの理解に、より効果的に働くのは類似のエピソードの想起であることが明らかにされた。

これらの研究結果から、他者の心情を正しく理解するためには、本人が類似の経験をするのが、1つの有効な手段であると言える。しかし、幼い子どもにとってはその機会は少ない。そこで、絵本の読み聞かせによって、日常生活では容易に体験しえないような多くのことがらを、疑似体験させることが他者の心情理解に効果があるか否かを検討することを試みる。

まず、絵本を繰り返し読み聞かせたり、いろいろな物語内容の絵本を読み聞かせたりしたならば、幼児の心情理解は促進されるのであろうか。この点を心理学的に検討することが本研究の第一の目的である。次に、幼児の心情理解は、当該の情緒の種類によってその成績に差が生じるのだろうか。この点については、従来の研究では必ずしも一貫した結果が得られていない。例えば、Borke (1971) や今井・桶本 (1973) は、喜びの感情は怒りや悲しみの感情と比較して共感されやすいことを実証的に示している。一方、岩田・山口 (1987) は情緒別での成績には差はみられなかったと報告している。そこで、本研究では、情緒の種類によって、絵本の読み聞かせにおける幼児の心情理解に差があるか否かという点についても検討を加えることを、第二の目的とする。

方 法

〈被験者〉

私立保育園年長児40名（男子17名、女子23名）、平均年齢5歳7か月である。彼らをクラス単位で、(1)読み聞かせ有群（男子9名、女子11名）、(2)読み聞かせ無群（男子8名、女子12名）に配置した。読み聞かせ有群の平均年齢は、5歳6か月、読み聞かせ無群の平均年齢は、5歳7か月であった。

〈材料〉

(1)絵本

筒井頼子・作：林明子・画の絵本『はじめてのおつかい』（1976 福音館書店）、筒井頼子・作：林明子・画の絵本『いもうとのにゅういん』（1983 福音館書店）、ジーン・ジオン・作：マーガレット・ブロイ・グレアム・画の絵本『はちうえはほくにまかせて』（1981 ペンギン社）の3冊を使用した。これらは、5歳児でも十分理解できる内容であること、読み聞かせによって、さまざまな心情体験ができる物語であること、を基準として選定された。『はじめてのおつかい』は全15場面からなり、喜び・不安・恐れなどの心情場面のある物語である。『いもうとのにゅういん』は全16場面で、喜び・恐れ・怒りの心情場面のある物語で、『はちうえはほくにまかせて』は全19場面で、喜び・怒りの心情場面のある物語である。

(2)心情理解テスト

このテストは浜崎（1985）のART（Affective Response Test）およびSCT（Social Comprehension Test）を参考に作成された。これは、物語の主人公に生じた情動に対する被験者の代理的情動反応傾向を測定するテストと、被験者の物語内容の理解と主人公の心情の認知の程度を測定するテストで構成されている。本研究の心情理解テストでは、5枚の表情図と6編の短い物語が用いられた。表情図には、喜び・悲しみ・恐れ・怒り・普通の表情をした子どもの顔が描かれている。また、物語は喜びと悲しみと恐れのいずれかをテーマとする短編が2編ずつ用意された。なお、物語の主人公の性と被験者の性は同性にした（男子は太郎君、女兒は和子さん）。以下は、その物語の内容である。

- 喜 び：①今日は、太郎君（和子さん：以下省略）のお誕生日です。お友だちが、太郎君のおうちに集まってお誕生日会を開いています。太郎君のお母さんは、ごちそうをいっぱい作ってくれました。太郎君は友だちからたくさんプレゼントをもらいました。
- ②今は、お絵かきの時間です。太郎君は絵を描くのがとても上手です。でも、今日はクレパスをおうちに忘れてきてしまったので、絵が描けなくて困っています。そのとき、隣の席のお友だちが「僕のを貸してあげるよ。」と言って自分のクレパスを貸してくれました。
- 悲しみ：①太郎君のおうちでは、一匹の犬を飼っていました。名前はシロと言いました。太郎君はシロをととても可愛がっていました。ところがある日、シロは車にはねられて死んでしまいました。
- ②太郎君は、おうちの中でお友だちと相撲をして遊んでいました。そのとき、お父さんが大切にしている花瓶を壊してしまいました。太郎君はお父さんに「お部屋の中で、相撲をしてはいけません。」と叱られました。

恐れ：①太郎君は幼稚園に通っている男の子です。ある日、太郎君は、幼稚園の帰りに突然大きい犬に追いかけてしまいました。

②今日は、太郎君は一人でお留守番です。お母さんは用事があって、夜にならないと帰ってきません。太郎君が留守番をしていると、急に空が暗くなって雷がなり始めました。

〈手続き〉

心情理解テストは個別で行い、読み聞かせは集団で行った。心情理解テストは被験者を保育園内の静かな部屋に同伴し、机の前、実験者の正面に座らせた。読み聞かせ有群には6回の読み聞かせの事前と事後に心情理解テストを行い、読み聞かせ無群には有群と同じ時期に心情理解テストを行った。両群とも、心情理解テストの実施時期の間には2週間あったが、この期間に有群には読み聞かせを行い、担任の先生には、可能な限り有群と無群とが交流を持たないように配慮してもらった。

心情理解テストの教示：テストを始める前に、「これから、お姉さんが〇〇ちゃん（被験者）に6つの話をします。話をよく聞いていてあとの質問に答えてください。答える時は、〇〇ちゃんの前にある5つの顔のカードを使います。」と言い、表情図の説明を次のように行った。被験者の前に並べてあるカードを1枚ずつ指さしながら「この顔はうれしいときのお顔ですね。」というように確認し、残り3枚（悲しみ・恐れ・怒り）についても同様の確認を行った。「普通」のカードについては「これは何とも思っていないときのお顔です。」と教示し、被験者に表情図の意味を理解させておいた。その後、1つの話を読んで聞かせ、「〇〇ちゃんは、今のお話を聞いてどんな気持ちになったかな。お姉さんに教えてください。」と言い、「ここに5つの顔があるから、〇〇ちゃんと同じ気持ちのお顔があったら1つだけ指さしてください。〇〇ちゃんは何とも思わなかったり、わからないときは「普通」のお顔を指さしてください。」と教示し、被験者の心情について回答を求めた。その後ひき続き主人公の心情を問うが、その場合には物語の絵カードを見せながら、「このとき太郎君はどんな気持ちかな。」と聞き、表情図を指さしながら、「この5つの顔の中から太郎君の気持ちと同じお顔を1つだけ指さしてください。わからないときは、「普通」のお顔を選んでください。」と教示した。

絵本の読み聞かせ：読み聞かせは有群にのみ行い、有群の保育室で実験者の前に被験者全員をすわらせ、通常の読み聞かせを行った。読み聞かせに使用した本は上記の3冊で、各2回計6回の読み聞かせが行われた。

結 果

心情理解テストの成績

結果の処理は次のように行った。心情理解テストにおける各心情場面ごとに、被験者の心情・主人公の心情が、それぞれの心情場面に適切かどうかの基準にもとづいて、2点・1点・0点の配点を行った。心情理解テストで用いられた情緒は喜び・悲しみ・恐れの種類であり、各情緒とも2つの物語を用いたので満点は12点となる。

表1は、心情理解テストの各情緒における群別の平均得点と標準偏差を示したものである。これをもとに、絵本の読み聞かせの有無を被験者間要因、心情理解テストの3種類の情緒と心心理

表1 各群の情緒別平均得点と標準偏差

		前	後	差
有 群	喜 \bar{X}	2.50	3.05	0.55
	SD	0.92	0.80	
	悲 \bar{X}	2.30	2.65	0.35
	SD	0.64	0.90	
	恐 \bar{X}	1.80	2.15	0.35
	SD	1.20	1.06	
無 群	喜 \bar{X}	2.45	2.80	0.35
	SD	1.12	1.08	
	悲 \bar{X}	2.70	2.35	-0.35
	SD	1.00	1.11	
	恐 \bar{X}	2.40	2.10	-0.30
	SD	1.07	1.30	

解テストの実施時期を被験者内要因とする $2 \times 3 \times 2$ の分散分析を行った。

絵本の読み聞かせの有無の主効果が $F(1, 38) = 0.07$ で有意ではなかった。また、情緒の主効果が $F(2, 76) = 5.70, P < .01$ で有意であった。そこで、LSD法による多重比較を行った結果、喜びと恐れの間、及び悲しみと恐れの間、それぞれ有意差が認められた ($MSe = 2.50, 5\%$ 水準)。しかし、喜びと悲しみの間には有意差は認められなかった。次に、心情理解テストの実施時期の主効果が $F(1, 38) = 3.90, .05 < P < .10$ で有意な傾向が認められた。交互作用については、読み聞かせの有無と心情理解テストの実施時期の交互作用が $F(1, 38) = 10.38, P < .01$ で有意であった。そこで下位検定を行った結果、読み聞かせ有群において心情理解テストの事前と事後の成績の間に有意差が認められた (表2と図1を参照)。さらに、読み聞かせ有群の成績の上昇が、読み聞かせの効果によるものであるか否かを検討するために共分散分析を行った結果、 $F(1, 37) = 7.21, P < .05$ で有意であった。次に、情緒の種類と心情理解テストの実施時期の交互作用も $F(2, 76) = 2.70, .05 < P < .10$ で有意な傾向が認められたので、下位検定を行ったところ、心情理解テストの事後において情緒の種類別の成績が有意であった。そこで、LSD法による多重比較を行った結果、喜びと悲しみの間、喜びと恐れの間それぞれ有意差が認められた ($MSe = 0.84, 5\%$ 水準)。また、喜びの情緒における心情理解テストの事前と事後の間に、 $F(1, 38) = 7.08, P < .05$ で有意差が認められた。

なお、表3の誤答分析表は、心情理解テストにおける回答状況を群別に示したものである。これについては、議論のところで言及する。

最後に、各群において心情理解テストの成績が性によって差があるか否かを検討するために、群別に分散分析を行ってみたが、有群・無群ともに性差は認められなかった。

表2 心情理解テストの群別平均得点と標準偏差

読み聞かせ		前	後	差
有群	\bar{X}	6.60	7.90	1.30
	SD	1.77	1.92	
無群	\bar{X}	7.55	7.35	-0.18
	SD	2.25	2.67	

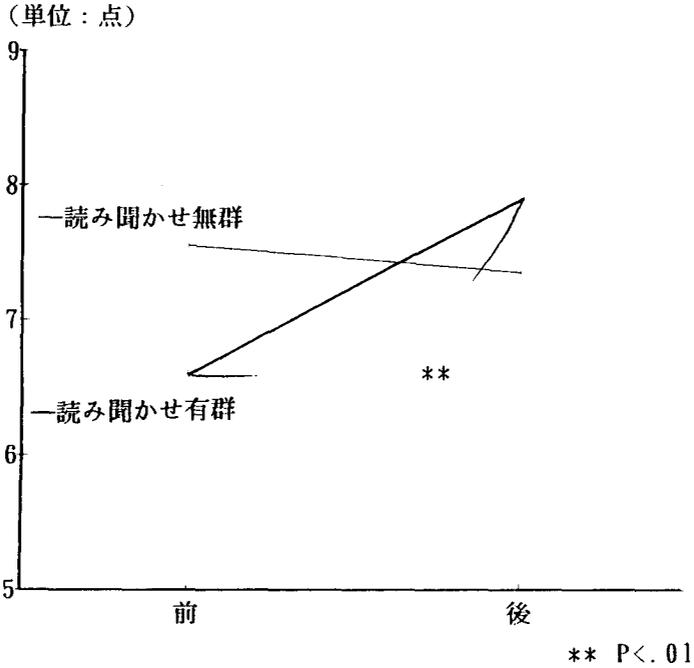


図1 心情理解テストの群別平均得点

表3 誤答分析表 (%)

			表情図の情緒					その他
			①喜び	②悲しみ	③恐れ	④怒り	⑤普通	
事前 編 の テ マ	短	喜	61.9	3.1	3.8	0.0	29.4	1.9
		悲	5.0	62.5	18.1	2.5	9.4	0.6
	マ	喜	73.8	1.9	1.3	0.6	22.5	0.0
		悲	3.1	62.5	24.4	3.1	6.9	0.0
	後	喜	3.8	30.0	53.1	3.1	10.0	0.0
		悲						

注：□内は正答を示す

議 論

本研究の目的は、絵本の読み聞かせが、幼児の心情理解を促進するか否かを実験的に検討するとともに、情緒の種類によって、幼児の心情理解に差があるか否かという点についても併せて検討することであった。本研究の目的に関連する主な結果は、次のとおりである。

(1)心情理解テストにおける事前と事後の成績を群ごとに比較すると、読み聞かせ有群は、事後の成績が事前の成績よりも有意に上昇していたが、読み聞かせ無群では、事前・事後の成績の間には統計的な有意差は認められなかった。

(2)情緒の種類(喜び・悲しみ・恐れ)別に心情理解テストの事前と事後の成績を比較すると、事後テストにおいて喜びのみに、有意な上昇が認められた。

(3)他の要因をこみにして3種類の情緒について心情理解の成績を比較したところ、恐れは喜びや悲しみよりも成績が悪かった。

なお、念のため被験者の性による差異を調べてみたところ、読み聞かせ有群・読み聞かせ無群ともに、性差は見いだせなかった。

以上の結果にもとづいて、考察を行う。

まず、結果(1)について考察する。

杉山(1993)は、絵本の読み聞かせの途中で、事物の存否や状態、登場人物の行動や心情などの質問を挿入すると、幼児の物語理解を促進することをみだしている。また、今井・中村(1993)は、絵本の読み聞かせの途中で文章中に叙述されている事物・人物等について、それらを単に確認するだけでも、幼児の物語理解が促進される事実を報告している。これに対し、本研究において、読み聞かせ有群の被験者に対して行った読み聞かせでは、特別の実験的操作を加えることなく読み手が普通に文章を読んで聞かせる方法がとられている。ではこの場合、幼児はどのような経験をしているのであろうか。まず、第1に挙げられるのは、聞き手である幼児は、物語の進展にともなって、絵本の登場人物のさまざまな行動や心情を読み手から耳で聞き取る、という体験をしていることである。

例えば、本研究の実験材料の一つである絵本『はじめてのおつかい』の第3場面では、「みいちゃんが、うたをうたいながらいくと、ちりんちりん、べるをならして、じてんしゃがきました。みいちゃんはどきんとして、へいにべたっとくっきました。」という文章が読み聞かされる。これは、主人公の「みいちゃん」が「恐れ」を体験した場面である。第5場面では、「あんまりいそいだので、いしにつまづいてころんでしまいました。ひやくえんだまがころころ、ころがっていきます。あしもても、じんじんいただきます。」という文章が読み聞かされる。これは、「みいちゃん」にとっては「悲しみ」の体験場面である。第6場面では、「くるくるさがしまわると、「あった!」くさのかげに、ぴかぴかひかって、ころがっていました。おかねがふたつともみつかったので、みいちゃんは、げんきにさかをかけのほりました。」という文章が読み聞かされる。これは、「みいちゃん」にとっては「喜び」の体験場面である。

このように、さまざまな絵本の物語を読み聞かされることによって、聞き手の幼児自身は、物語の主人公と極めて類似した心的体験をしている。次に、一方で読み手としての幼児は、第三者の視点から、読み聞かされる物語の登場人物の行動や心情について、その因果関係を客観的にとらえるという経験をしていると考える。本研究において、有群の被験者が、読み聞かせ後の方が

無群よりも成績がよくなっていた事実は、上述したような絵本の読み聞かせにおける「読者」としての多様な経験が、事後に行われた心情理解テストの心情場面において他者の心情を認知し、他者の心情に共感することを促進させるのに有効であったことを示唆している。

次に、結果(2)、他の情緒と比較して、喜びの情緒の成績が有意に上昇した理由を考えてみよう。

本研究の被験者のように大部分の幼い子どもにとって、日常生活における喜びという快の情緒は、悲しみ・恐れ・怒りなどの不快な情緒よりも経験する機会の多い情緒であると思われる。このような被験者の経験の差が、心情理解テストの成績に反映したのではないと思われる。さらに、絵本の読み聞かせを行った有群に関しては、次のような解釈も可能であろう。

一般に、多くの物語は、一連のストーリーの流れの中で、登場人物の喜び・悲しみ・恐れ・怒りなどの、さまざまな心情場面によって構成されている、と言えよう。しかし、ほとんどの物語は、さまざまな心情場面を含みながらも、最後は「ああ、よかった」と胸をなでおろすようなハッピーエンディングで終結する。特に、幼児を対象とした物語には、全くの悲劇で終わるようなものは皆無とってよいのではなかろうか。本研究で使用した3冊の絵本もまた同様に、最後はハッピーエンディングの物語であった。物語の開始部や展開部で「読み手」がどんなにハラハラしても、結末がハッピーエンディングならば、それが「読み手」の印象に決定的な影響を与えるのではないだろうか。このように、本研究において絵本の読み聞かせ後、喜びの情緒の成績が有意に上昇した理由の一つとして、物語の終結が「快」であったことを挙げておきたい。

次に、結果(3)について考察する。

上記の結果(3)を一つの数式で簡略化して表すと、喜び=悲しみ>恐れとなる。注意すべきは、これは、あくまでも本実験の被験者を対象に実施した心情理解テストの三つの下位項目間の成績—いわば各項目間の通過率を比較した結果の表示であって、幼児の心情理解の発達自体を情緒別に示したものではないことである。すなわち、本実験の心情理解テストにおいて、喜びと悲しみに関する理解度には差がなかったが、これら二つの情緒と比較した場合、恐れに関する成績が有意に低かった結果を示しているのである。一般的には、古くはBridgesの研究でも知られているように、幼児期において喜び・恐れ・怒りなどのほとんどの情緒は、既に2歳までに発達している(今井, 1973)。では、本研究において喜びの心情理解に比して、悲しみや恐れ的心情理解の成績が低かったのはなぜだろうか。

本研究では、幼児の言語発達が未分化な段階にあることを考慮して、Borke (1971)、今井・楠本 (1973)、岩田・山口 (1987) らと同様に、言語で回答させる代わりに、表情図を選択させる方法を採用した。本研究では、喜びの心情は、笑顔で示されている。実験者からストーリーを聞いて表情図を選択する場合、「喜び」については事前・事後とも被験者が①「喜び」を正しく選び、誤答はこれと類似度の高い⑤の「普通」において数多く見られたことから、「喜び」の表情図は、「喜び」の情緒を適切に表していたと考える(表3参照)。ところが、「悲しみ」や「恐れ」については、実験者からストーリーを聞いて表情図を選択する場合、事前・事後とも、表3に示したように、「悲しみ」では③の「恐れ」を選択したことによる誤答が多く見られ、逆に「恐れ」では②の「悲しみ」を選択したことによる誤答が多く見られる。そして結果は、「恐れ」では「悲しみ」と比較して、このような誤答の影響が有意に大きかったことを示している。このような侵入的誤答が生じたのは、「悲しみ」という情緒と「恐れ」という情緒の類似性が高いこと他に、被験者が「恐れ」=「こわい」=「泣く」、と解釈したためだと考える。すなわち、本研究の「恐れ」の心情理解度が「喜び」や「悲しみ」よりも有意に低かった一因として、実験材料の表情図

に誤答を生じさせやすい欠陥があったことがあげられる。このように、用いた尺度に多少の問題はあるものの、本研究の主目的は、絵本の読み聞かせ前後における心情理解度の変化を見ることにあったので、同一の尺度を用いて前テストと後テストの成績の比較を行ったわけである。その結果については、既に(1)および(2)で考察した。

最後に、読み聞かせ有群・読み聞かせ無群ともに、心情理解テストの事前・事後の成績に男女差がみられなかったことに関して触れておく。一般には男子よりも女子のほうが共感性が高いと考えられているが、従来の研究を見ると、必ずしも一致した結果が得られていない。以下に、いくつか例を挙げてみる。児童期の共感性の発達を研究した浅川・松岡（1987）は、Feshbachら（1968）のASTを翻訳したのを用い、被験者（小学校1・3・6年生）に各例話に対する被験者自身および主人公の感じている情動内容とその理由を記述式で回答させた。その結果、1・6年生では男子よりも女子の方がよく、3年生では性差はみられなかった、と報告している。一方、岩田・山口（1987）では、浜崎（1985）のARTを用い、幼児を対象に表情図選択法で回答を求めた結果、性差は認められなかった。また、今井（1974）は幼児と児童を対象に共感性の発達を研究したが、回答様式に言語化群と非言語化群（表情図選択）を設け、性差を検討したところ、言語化群では男子の方が成績がよく、非言語化群では性差は認められなかった、と報告している。これらの研究結果は、対象児や回答様式が異なるため直接的な比較はできないが、少なくとも回答様式が成績に大きな影響を与えることを示唆している。

間宮（1979）は、従来の研究結果をもとに、言語能力については幼児期より、男児よりも女児の方が優れていると結論づけている。本研究の被験者のように、言語能力が十分に発達していない幼児に対して、被験者自身や他者（主人公）の心情を適切に言語化させることは困難である。しかし、表情図を用いて回答を求める場合にはその困難さは軽減される。このため男児も女児と同じ程度の成績が得られたのではないだろうか。今後、この種の実験において性差などを検討する際には、回答様式の要因も十分に考慮すべきであると思われる。

要 約

本研究の目的は、絵本の読み聞かせが、幼児の心情理解を促進するか否かを実験的に検討するとともに、情緒の種類（喜び・悲しみ・恐れ）によって、幼児の心情理解に差があるか否かという点についても併せて検討することであった。

被験者は、保育園年長児40名であった。彼らは、クラスごとに、①読み聞かせ有群②読み聞かせ無群の2群に配置された。

材料は、読み聞かせる物語として、筒井頼子作・林明子画の絵本『はじめてのおつかい』（1976 福音館書店）、筒井頼子作・林明子画の絵本『いもうとのにゅういん』（1983 福音館書店）、ジーン・ジオン作・マーガレット・プロイ・グレアム画の絵本『はちうえはほくにまかせて』（1981 ベンギン社）の3冊を使用した。他者の心情をいかに認知し、他者の心情にどの程度共感できるかを測定するために、浜崎（1985）を参考に作成した心情理解テストを用いた。

読み聞かせ有群・無群ともに、心情理解テストを2回実施した。両群とも心情理解テストの実施時期の間には2週間あったが、この期間に有群には読み聞かせを行い、無群とは交流をもたないように担任の先生に配慮してもらった。読み聞かせは、上記の3冊を各2回ずつ繰り返したので計6回行った。読み聞かせる際は、有群の保育室で被験者全員を実験者の前に座らせ、特別な

実験的操作を加えることなしに通常の読み聞かせを行った。主な結果は、次のとおりである。

- (1)絵本の読み聞かせを行った群のほうが、行わない群よりも他者の心情理解の成績が上昇した。
 (2)喜びの情緒は、悲しみ・恐れ of 情緒よりも成績が上昇した。(3)3種類の情緒について成績を比較すると、喜びや悲しみよりも恐れ of 成績が低かった。

以上の本研究の結果をもとに、さまざまな角度から検討が行われ、絵本の読み聞かせが幼児の心情理解を促進する一つの有効な方法であることが明らかにされた。

引用文献

- 赤羽末吉 1986 子どもの絵本をみつめて—画家として— 日本子どもの本研究会編 子どもの本の学校
 ほるぷ出版
- 浅川潔司・松岡砂織 1987 児童期の共感性に関する発達の研究 教育心理学研究 35, 231-240.
- Borke, H. 1971 Interpersonal perception of young children: Ego-centrism or empathy? *Developmental psychology*,
 5, 263-269.
- Feshbach, N.D. & Roe, K. 1968 Empathy in six and seven years olds. *Child Development*, 39, 133-145.
- 浜崎隆司 1985 幼児の向社会的行動におよぼす共感性と他者存在の効果 心理学研究 56, 2, 103-106.
- 本田和子 1980 絵本 村山貞男監修 幼児保育学辞典 明治図書 91.
- 市川和子 1982 思いやりの心, 自律心を育てる読書指導 日本読書学会第26回研究大会発表資料集,
 49-54.
- 今井靖親 1973 情緒の発達 田中敏隆編著「乳幼児の心理」学苑社 第5章 131-143.
- 今井靖親 1974 幼児・児童における共感性の発達 奈良教育大学紀要 第23巻 第1号 231-239.
- 今井靖親・桶本真也 1973 幼児の共感性に関する実験的研究 奈良教育大学紀要 第22巻 第1号
 185-193.
- 今井靖親・中村年江 1993 絵本の読み聞かせに関する心理学的研究(Ⅳ) —幼児の物語理解に及ぼす視点
 と絵本提示の効果— 奈良教育大学教育実践研究指導センター紀要 第2号 67-75.
- 今井靖親・廖 小慧・中村年江 1993 日本と台湾における絵本の望ましい読み聞かせ方法に関する比較
 奈良教育大学紀要 第42巻 第1号 211-223.
- 岩田純一・山口克巳 1987 絵本の理解に及ぼす共感性の役割 金沢大学教育学部紀要 136, 53-58.
- 漢那憲治 1979 読み聞かせの効果(Ⅰ) —読書力におよぼす読み聞かせの効果についての—考察— 読書
 科学 22, 95-104.
- 久保ゆかり・無藤 隆 1984 気持ちの理解における類似経験の想起の効果—共感的理解の発達の検討—
 教育心理学研究, 32, 296-305.
- 間宮 武 1979 性差心理学 金子書房
- 松居 直 1973 絵本とは何か 日本エディタースクール出版部
- 阪本敬彦 1974 絵本 内山喜久雄監修 児童臨床心理学辞典 岩崎学術出版社 48.
- 佐々木宏子 1975 絵本と想像性 高文堂出版
- 杉山美加 1993 絵本の物語理解に及ぼす質問の効果 奈良教育大学卒業論文
- 山本道子 1990 読み聞かせと想像・表現 日本保育学会第43回大会研究論文集, 536-537.

Effect of Reading Aloud Picture Books on Young Children's Comprehension of Emotions

Yasuchika IMAI and Junko BOI*

(Department of Psychology, Nara University of Education, Nara 630, Japan)

(Received April 28, 1994)

The purpose of this study was to carry out an experimental investigation of whether or not children's capacity for comprehension of emotions is encouraged through the reading aloud of picture books, and further, to determine where there are differences in the way children experience the emotions of pleasure, sadness, and fear.

The subjects were 40 five-year-old nursery school children. They were divided into two groups: the reading group (group 1) and the non-reading group (group 2). The experimental materials used were three picture books suitable for reading aloud to children, and emotion comprehension tests.

At the beginning of the experiment, the children of both groups were subjected to the emotion comprehension tests. The reading group then had each of the three picture books read to them twice, giving a total of six readings. After the readings, the two groups were again subjected to the emotion tests.

The main findings were as follows:

1. The reading group attained higher scores than the non-reading group in the second emotion comprehension tests.
2. Scores pertaining to feeling of pleasure were higher than those of sadness or fear.
3. Scores pertaining to feelings of fear were lower than those of pleasure or sadness.

The results suggest clearly that the reading aloud of picture books to children is an effective way of developing a child's emotion comprehension capacity.

* Kashihara City Miminashi Kindergarten